

楽楽

~Raku laku

2007年11月25日発行 担当：松本

《練習日程》

月 日		会 場	時 間	備 考
11月	25日(日)	旭丘公民館	19:00~21:00	
12月	1日(土)	//	//	
	8日(土)	//	//	
	15日(土)	//	//	
	22日(土)	//	//	
2008年 1月	5日(土)	新 年 会 <康々亭 18:00~>		
	12日(土)	旭丘公民館	19:00~21:00	
	19日(土)	//	//	
	27日(日)	//	//	
2月	2日(土)	//	//	
	9日(土)	//	//	
	16日(土)	//	//	
	23日(土)	//	//	

公民館まつり

- ▶ 2008年3月2日(日) あさひのホール
 ▶ 曲 目 “旅のかなたに”より3曲 (曲順未定)
 1. 歌 2. 足 3. +α(旅のかなたにの中より)
 ~全曲暗譜……一日でも早く楽譜を離そう!!~



《係からの御連絡》

◎ リクリエーション係りより

▶ 旭混声合唱団平成19年度新年会

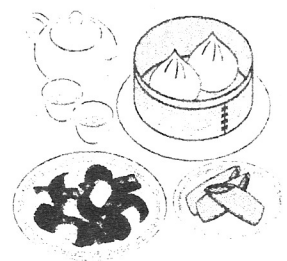
日 時 2008年1月5日(土) 18:00開始

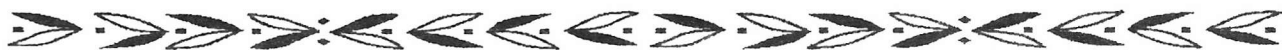
場 所 康々亭(カンカン亭) 瀬戸市西原町1-1 TEL 0561-84-6644
 ※名鉄瀬戸線 新瀬戸駅(愛知環状鉄道 瀬戸市駅)から送迎バスが出ます。

会 費 女性：4,000円 男性：5,000円

☆~毎度恒例の余興出演者募集!!~☆

出場希望者(全員?)は内容と時間をお配りする用紙に記入して
 12/15日までにレク係A.大沢さんかS.谷口さんまで提出して下さい。





旭混声合唱団第7回演奏会

と き：2008年9月7日（日） 14：00開演

と ころ：尾張旭市文化会館

ステージ：1ステージ 宗教曲

2ステージ 旅のかなたに

3ステージ 沖縄音楽特集より数曲 （ステージ順は未定）

・・・いよいよステージの内容も具体的になってきました。3月の公民館まつり、6月の県連合唱祭、このあたりまでには全ステージ(?) 楽譜完了(?) という予定のようです。もらった楽譜はすぐに暗譜するぐらいの気持ちでないと追いつけませんぞ! 歌いこんだ歌は本番で、きっと聴いてくださる人々に感動していただけたと思います。



——第26回尾張旭市民音楽祭(11月11日)を聞いて——

ソプラノ 佐久間 綾子

当日は息子の行事参加があり、行けない予定でしたが、雨のため行事が中止になり家族で聞かせていただきました。

まず息子の第一声『さっきの○×よりキレイだね』に、『コラッ、シーッ』とあわせて子供の口をふさぎましたが、やはり響きの美しさはピカイチですね。

ただ楽しく歌っているグループも多い中、毎週真剣に音楽と向き合っている姿勢がこういう形になって現れるんだなぁと思ってしみじみウットリしていました。宗教曲という性質上でしょうか、少し元気がないような気もしたのですが、その分つつまじやかな美しさは増していたように思えました。

雨のおかげで一家4人、幸せなひとときを過ごさせて頂きました。

旭混声の大ファンより

アルト 前川 久美子

瀬戸以来2度目の旭混声を聴きました。今回は、ちょっと気持ちの持ち具合が違って、少しハラハラドキドキもしました。楽譜を見てしまったからでしょうか……。ハプニングもありましたが、演奏が終わって客席からの拍手があったときは子供のピアノの発表会を見守る母親のようでした。まだ入団して間もない私なのに旭混声が愛おしく思えてなりませんでした。旭混声のすごさは、ひびきです。それもまだこれから大きくなりそうな予感のするひびきです。瀬戸、尾張旭と2度もこのひびきに魅せられてしまいました。ただ単なる声の響きだけではないひびきの素を是非探してみたいと思います。

もっともっと磨けば光る

アルト 森下 修子

ミサ曲は学生の頃歌った程度で馴染み薄く、最初は難しく思いましたが、今日のステージでこれほど美しい曲は滅多に無いだろうと思うようになりました。磨いて磨いていくうちに光り出し、本当に完成すれば宝石のように光を放ち始めるだろうと思います。磨きの途中で時々“ピカッ”っと光ったりする時は感動します。聞く人に鳥肌立つような思いをしてほしいというのが私の目標です。

練習もステージもいつも近藤真弓さんが隣でした。誰からも愛され、私も大好きな人でした。

中村八大さんの告別式に永六輔さんが、読経の上にゴスペルを同時に載せて式場に流したそうです。(勿論お坊さんの了承を得てですが)心に浸み入る様に美しかったそうです。合唱団員として真弓さんの告別式に出席させていただいて、低い美しい読経の上に私達のアベ・マリアを載せて式場に流したら、真弓さんは喜んで下さるのではなどと思ったりいたしました。

自分の大切な人を亡くす事ほど深い悲しみはこの世に他にはありません。改めてそう思います。…ステージでの感想をとのお話でしたが、趣旨が外れたかもしれません。

近藤 真弓さん

やすらかにねむりたまえ

享年三二才

十一月十四日、突然の訃報に、誰もが耳を疑い信じられない思いがしたことでしょう。その三日前の市民音楽祭ではあなたと一緒に歌ったばかりでしたし、普段とまったく変わらない優しい笑顔を見ただけで、だから本当にショックでした。

人の死でこんなに悲しく、涙したことはありません。それはあなたの死があまりにも早すぎるからです。あなたがどんなにみんなから愛され信頼されていたか、あなたの職場から、会場に入りきれないほどの園児とお母さん達が焼香に訪れ、悲しむ姿を見て感じました。そして我が国にとってもあなたはかけがえのない人でした。

先回の演奏会では、あなたとハリーとのステージでの掛け合いは、団の持つアットホームな雰囲気さらに引き出し、会場をひとつにさせて下さいましたね。どんなことも気軽に引き受けて下さって、やり終えた後も偉ぶることなく笑顔を返して下さいましたね。

読経の終わった後、お坊さんが「寿命とは授命「授かる命」と解釈して下さい」とい、「とお話下さいました。が、本当にそうだなと思いました。あなたは自分の人生を授かった命として、いつも夢を抱き、誰に対してもその笑顔で優しく接して下さいました。

真弓さん ありがとうございます！

わたしたちはあなたのことを忘れません。これからも歌を通してあなたの分も心をこめて歌ってゆきます。

A 松本

歌

谷川俊太郎

誰かが
私を
歌っている
雲の調べで
木々の
和声で
いつかやむ
心臓の
韻律
だが歌は続く
君を
讀めて
川底に
流れる
水の旋律
廃墟に
響く
夜の休止符

足

寺山修司

生まれてから今日まで
何歩あるいてきただろうか
と
私はじぶんの足に
たずねてみる
それは
書物の旅路よりもはるかで
そのくせ
心から心までの数センチメートルにも
足りない
私は
墓場まで
もう あと何歩あるくか知らないが
歩幅は
いつもさびしい記録である
足よ
じぶんを死へはこぶ
車のない二輪車……

「旅のかたに」より



《編集後記》

中日新聞夕刊の連載小説「遊女（ゆめ）のあと」（作：諸田玲子）がけっこうおもしろい。徳川吉宗の時代の話。江戸から妻を寝取られ女敵討ちに名古屋にやってきた下級武士“高見沢鉄太郎”と、博多から成り行き上、異人の命を助け駆け落ちした極貧の漁師の妻“こなぎ”。途中愛した異人とは生き別れになったままだが、やはり名古屋へやって来た。儉約令の出ている時代、名古屋は宗春の温知政要の政策で大変な賑わいを呈していた。ハラハラする話の展開や、色恋の行方もおもしろいが、城を中心として本町通り、広

小路、四間道、納屋橋、大須…等々、次々と馴染みのある町の名が出てきて、頭の中で現在の地図と重ね合わせながら主人公の動きを想像すると余計面白い。ちょうど名古屋市博物館で『大にぎわい城下町名古屋』（11/4迄）をやっていて見に行ったが、数々の展示物や絵や書物に先人達の生き生きとした営みが見えて、その知恵や文化の高さに誇りを持ったりした。町の名はぜったいに残してほしい。町の名には由来がある。

さて、鉄太郎とこなぎはこれから先どうなるのでしょうか…
A. 松本